



新世紀のキャンパス

Campus of New Century

長岡造形大学 第3アトリエ棟



限られた敷地面積を最大限に生かしながら、周囲のランドスケープに調和させた外観。



ランダムに配置された平行四辺形の窓は、同じ大きさ・形が一つとない。

自然界に存在しない角は使わず、柱のない外壁だけで支えられたデザインは、2010年にグッドデザイン賞受賞。





吹き抜けを中心に各階を半階ずつずらすステップフロアを採用。デッサン室の天井高を確保した効率的な断面計画だ。

長岡造形大学は、元東京造形大学学長であった豊口協理事長が、長岡市から要請を受け、1994年に新設した公設民営大学だ。「デザインの専門大学」として、“すべてがデザインの教材”とキャンパス整備を進めてきた。そして2010年に竣工したのが、第3アトリエ棟だ。

なぜ、デザインだったのか。豊口理事長は「デザインにはもののもつ機能を十分に発揮することで最も美しい形に

なるという考えがある。さらに良いデザインは、世界の共通言語としてコミュニケーションツールになりうる。このコミュニケーションのカギを握る人材を育成したかった」と語る。

開学時は造形学部の1学部2学科で、1年生全員が同じカリキュラムで学んでいた。しかしデザインの領域の広がりに伴い改組を繰り返したことで、教育が徐々に分断されていったという。そこで2009

年に「プロダクトデザイン」「視覚デザイン」「美術・工芸」「建築・環境デザイン」の4学科制とした際に、全学科共通の初年次教育カリキュラムを導入した。学際化が進むなかで、もう一度、教員と学生に横串を通して一緒に学ぶ必要があると判断したのだ。この初年次教育の場として建設されたのが第3アトリエ棟である。

第3アトリエ棟は主に1・2年生のための教育棟で、1Fに「デッサン室」、M2Fと2Fに「アトリエ」、M3Fと3Fに「視覚デザインアトリエ」を備えている。ここで基礎造形力を養い、造形学部共通の基礎力を身につける。2年次には、例えば美術・工芸学科では、鍛金とガラスなど、異素材を組み合わせる作品を作るコラボレーション課題があり、学科内のコースをまたいでデザインの現場を体感できる。こうした学びが功を奏し、就職希望者が卒業者の8割超と美大に比べ高いことも誇りだという。

第3アトリエ棟のもう一つの目玉は、1Fの市民工房だ。開学以来“地域とともに生きる大学”をコンセプトに、門や塀のない、地域に開かれたキャンパスを目指してきた。「多目的実習室」「陶芸実習室」「ガラス実習室」に分かれた市民専用の工房では、トンボ玉や純銀アクセサリー、電動ろくろ・手びねりの陶芸など、10コースを超える講座を開講。定員10人の少人数でプロ仕様の道具を使い、ものづくりの喜びを体験してもらう。また、情操教育を目的とした小学生を対象とする「こどもものづくり大学校」を開講したところ、定員の倍を上回る200人が押し寄せたという。

「募集や評判が狙いじゃない。地域の大学は何をしなければいけないかということ。これが新時代の地域の大学の姿です」と豊口理事長。常にチャレンジを続ける同大学の今後が楽しみだ。

(取材・文／本誌 能地泰代)



1F エントランス吹き抜け。遠近法を応用し、階段幅を下部に行くにつれ狭くすることで、平行に見える仕掛けが。



3つの教室を1ユニットとし、ガラスやカーテンの間仕切りで大教室・小教室とフレキシブルに対応できるアトリエ。

全学科の1年生の半数(約100人)が一堂に会し、他学科を含む10人以上の教員からマンツーマンで指導を受けるデッサン室。

